

## 絶食系男子となでしこ姫 — 国際結婚の現在・過去・未来



■ 山田昌弘 著  
■ 大洋社新書  
■ 2012年初版  
■ 1,200円(税別)

日本経済が長期にわたって停滞しているにもかかわらず、企業は相変わらず女性の能力を活用することができない。若い男性たちは、(男性の)結婚の前提となる安定した経済力という資源を得ることができず、目の前の女性たちに対して、積極的にアプローチすることができない。そんな中で活躍の場所を求めて、海外に飛び出す若い女性。この行動自体は今に始まったことではないが、そのことの結果として、今までの欧米系とは異なるアジア系の男性との国際結婚が増えてきていることを、その背景とともに提示しようというのが本書のもくろみである。

東アジアを研究対象とする評者としては、「アジア人男性」といった内実のないカテゴリーでひとくくりにするおおざっぱな議論には疑問を感じるが、一般向けの本としてはこれでもよいのかもしれない。ただ香港、シンガポール、さらに本書に出てこない、上海、北京といった中国文化圏の都市に、従来の英語圏とは異なる女性の活躍の場が生まれていることは確かで、これらの社会は企業における女性の

地位も高く、注目に値する現象だろう。それが日本女性の結婚行動にマクロに影響を与えるようなものになるのかは、今後の展開次第だが。

### 国際結婚

日本国内の結婚の約5%が国際結婚、2010年では約3万件である。従来は在日韓国人・朝鮮人と結婚がその多くを占めていたが、現在国別のトップは中国になる。農村部へのアジアからの嫁入りの影響もあり、国内の国際結婚の約8割が日本人男性と外国人女性によるもの。国外の国際結婚は約1万件あり、こちらはB級以上が日本人女性と外国人男性との組み合わせとなる。女性の階層上昇層の影響を見て取ることができる。ちなみに国際結婚の場合には、外国人の配偶者は日本の戸籍に入るわけではないので、別途届け出さない限り夫婦両親にはならない。

著者：鶴嶋山 角（東京大学大学院総合文化研究科教授）



## 公正な社会とは — 教育、ジェンダー、エシニシティの視点から



■ 富島秀、杉原名建子、本田量久 編  
■ 人文書院  
■ 2012年初版  
■ 2,300円(税別)

本書は、そのタイトル通り「社会的公正」をテーマとし、現代社会に存在する不平等や格差について論じている。「教育」「ジェンダー」「エシニシティ」という3つの領域について、各テーマを専門とする著者により、実証的なデータや事例を交えながら現代における不平等の発生機序が洞察されている。

序章で「テーマの焦点化は、主に社会学的関心からなされた」と述べられているように、社会的不平等が生じている原因について「グローバリゼーションの拡大」や「新自由主義的な政策の広がり」「社会の流動化」「再帰性」など現代社会の特徴を踏まえた上で理論的考察に重点が置かれている点が本書の特徴であろう。従って、ジェンダーやエシニシティに関する古典的な差別が現代においてもなお残存しているといった指摘にとどまらず、社会的不平等の現代的な特徴が炙り出されている。

現在の日本では、雇用情勢の悪化に好転の兆しが見えず「格差の拡大」が深刻さを増し、また近隣諸国との緊張も高まりつつある。さらに、本書の中で

も触れられているように、東日本大震災と原発事故という「公正」をめぐる問題が強く顕現化される事態にも直面している。それゆえに、社会的公正をめぐる現代的な問題を鋭く分析している本書の意義は大きい。

### 新自由主義(ネオリベラリズム)

1980年代以降に先進国とされる国々において主流となつた政治的立場で、それまでの福祉国家に代わり、低福祉の「小さな政府」を目指す。その肯定的側面として、競争原理の導入による技術的発展や経済の活性化が謳われ、様々な分野の民営化による市場開放はその政略のひとつである。しかし、「自由」であることは「自己責任」という意識と裏腹である。本書の第3章で引用されているベックの「社会的不平等の個人化」という表現のとおり、現代社会では、貧困などの不平等が「個人的」問題と見なされることが少なくない。本書では、新自由主義がもたらした「自己責任」という価値観によって隠べ、それがちな「社会的」問題が取り出されている。

著者：阪井 俊文（九州女子大学非常勤講師）



## 父子家庭が男を救う



■ 豊川治樹 著  
■ 講談社  
■ 2012年初版  
■ 1,800円(税別)

高度にジェンダー化した社会は、男性にも決して幸せをもたらさない。平成22年の男性の自殺率は全体で女性の約3倍、また配偶者と離別した男性の自殺率は配偶者の5倍にも及ぶ。一方でDV、性暴力、買春、ボルといった女性への暴力の加害者として被告席に座り続ける。

その背景に「男という病」の存在があることを著者が明確に指摘する。ここで「男病」とは、幼少時からの競争の強制からの疲れ、他者を心から信じることができない孤独、本当は弱く脆い自分を他者に正直に聞くことができない臆病、家事・育児などの具体的で人間的な苦みから疎外されたことによる存在の希薄化と弱体化、尊敬に基づく愛を育むべき女性への抑圧・支配に疑問を抱げず、実際には女性に依存しないと生きる実感が持てない幼児性の5点である。「男病」は社会に蔓延し、男性も女性も生き辛さを感じている。

父子家庭体验こそが男性がこのような男病を克服し、豊かさを回復する唯一の手段であると著者は大胆に提言する。著者自身、小4と中2の2人の子どもと共に残され、パニックに陥りつつ家事・育児に貢

任を持って取り組んだことで、生活の豊かさを知り人間性を回復したと言っている。一つ一つが悲戦苦闘に裏打ちされており、すんなりと伝わってくる。

新聞記者という不規則で過酷な典型的会社人間であった著者が、仕事を続けながら「家事をする男」となって変身を遂げたことは、誰にも可能性があることを示してくれている。

### 父性・母性

子育て、特に幼少期の子育てに母性は欠かせない。母性は母本能的に持つものであるといふ「母性神話」はまだ根強い。一方で、社会的なルールを教える父性は子どもの社会化にとって必要なものであり、子どもの学校不適応の背景に父親不在が指摘されて久しい。しかしながら、母性、父性は明確に分けられるものではなく、また、母親、父親が専一的に担当のつもりはない。これらは生得的に持っているものではなく、親として育つ／育てられる過程で学習していくものであり、両方の親が備えておく必要があるのだと言える。

著者：鶴嶋山 角（名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授）

## 女性ならではの知恵と工夫で農業ビジネスに新しい風を 東北発！女性起業家28のストーリー



■ フレインワークス 東北地域環境研究室 共著  
■ カナリア書房  
■ 2012年初版  
■ 1,500円(税別)

北国の女は寡黙だ、と思われていて行動的なイメージはうすい。ところがどっこい、東北の農村には四季折々の気候、風土からたらず農かな自然の恵みを活かした仕事づくりに力を發揮する女性たちが多くいる。本書は農業ビジネスを起業した新潟を含む東北7県28人の女性の活動を紹介している。

地元で生まれ嫁いだ人、夫所から来た人で農業は初めての人、夫と共に仕事づくりをした人、地域の仲間たちと会社をつくった人など、起業のきっかけは仕事のスタイルもさまざまである。だが、どの人も自分の暮らしとバランスをとりながらビジネスを展開している。この28人の女性たちは自分の置かれた環境を柔軟に活用して、仕事を創出している。本書はこれから起業したいと考えている女性、また自分に何ができるかを模索している人にとって多くのヒントを与えてくれるであろう。

本書は3.11東日本大震災直前の取材により執筆されている。震災後、本書に登場している宮城の女性たちはそれぞれの地域で避難生活をしながら他

人の生活再建にも力を発揮している。宮城県で雇用の場を創出している山形県の女性もいる。それに苦難を乗り越えて活動を続ける東北の女性たちの震災後の奮闘を全国のみなさんに応援していただきたい。震災後の続編の刊行を期待したい。

### 農村女性起業

農村地域に住む女性が中心となり、地域産物を活用した特産加工品づくりや直売所での販売、農業レストランの経営などを行なう女性の収入につながる活動をすること。近年、農山漁村では、地域農産物を活用した特産品づくり、朝市、農業レストランなど、女性による農林漁業従事者の半数を占める女性の経営参画、地域参画、社会参画を進めることは、地域活性化の面からも重要であり、農村女性の経済的自立や社会的的地位の向上、地域社会・経済の活性化、そして都市と農村の交流に大きく寄与する。

著者：足立 千佳子（扶桑書記社員）

